

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00485

研究課題名（和文）文学王国アルゼンチンの成立（1938～76年）-作家と出版社の相互作用の分析

研究課題名（英文）The Foundation of Argentine as a Literary Empire(1938-1976): the Analysis of the Interactions between the Writers and the Publishers

研究代表者

寺尾 隆吉 (Terao, Ryukichi)

早稲田大学・社会科学総合学院・教授

研究者番号：80434405

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：スペイン語圏とラテンアメリカ全体を視野に入れつつ、20世紀アルゼンチンにおける出版業の発展を展望し、ホルヘ・ルイス・ボルヘスなど有力作家たちの創作活動との関係を分析した。最も大きな成果は、2024年5月刊行の研究書『ラテンアメリカ文学の出版文化史—作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成』（寺尾隆吉編著、勉誠社）であり、ここに三本の研究論文が収録された（寺尾隆吉著「20世紀のラテンアメリカにおける文学出版業」、同「出版黎明期のアルゼンチンとホルヘ・ルイス・ボルヘスの創作」「ドン・キホーテの作者ピエール・メナル」の背景」、大西亮著文芸誌「『スール』とラテンアメリカ文学」）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

出版社と編集者が創作にどのような影響を及ぼしているのか、ホルヘ・ルイス・ボルヘスやアドルフ・ピオイ・カサーレス、シルビナ・オカンポといった世界的に評価の高い作家を例に、具体的に実証できたことには非常に大きな学術的意義がある。また、いわゆる「古典」とされる作品がどのように生まれるのか、出版社の戦略と関連づけながら分析できたことも重要な成果だと言える。こうした観点から行われた研究は、ラテンアメリカ文学のみならず、世界各地の文学研究に新たな視座を提供する可能性を秘めている。

研究成果の概要（英文）：Overviewing the Spanish-speaking world and Latin America, this research explores the development of the publishing industry in 20th-century Argentina and analyzes its relationship with the creative activities of prominent writers, such as Jorge Luis Borges. The most important achievement is the publication of the research book, *The Publishing Culture in the Latin American Literature: Writers, Publishers, Literary Journals and the Formation of the International Literary Network*, that contains three essays: "The Literary Publishing in 20th-century Latin America" (Ryukichi Terao), "The Dawn of the Argentine Publishing and Jorge Luis Borges's Literary Creation: Backgrounds of "Pierre Menard, autor del Quijote" (Ryukichi Terao) and "Sur and the Latin American Literature" (Makoto Onishi).

研究分野：現代ラテンアメリカ文学

キーワード：現代ラテンアメリカ小説 アルゼンチンの出版業 文芸雑誌の役割

1. 研究開始当初の背景

1960年代から70年代にかけて「ラテンアメリカ文学のブーム」を担った主人公たちの大半が他界した2010年代以降、彼らの書簡や日記など、私的な資料の公開が急速に進み、それまで知られていなかった「ブーム」の背景が次第に明らかになってきた。ガブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』やホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』など、ラテンアメリカ文学の名作といわれる作品についても、出版にいたるまでのいきさつや、編集者と作家のやりとりなどを知る手がかりも増えてきた。それに伴って、ペルー人研究者カルロス・アギーレやアルゼンチン人研究者ホセ・ルイス・デ・ディエゴなど、名作の出版に関する研究も行われるようになった。

また、アルゼンチンでは、「アルゼンチン雑誌歴史アーカイブ AHIRA」を筆頭に、有力文芸雑誌のPDF公開が急速に進んでおり、こうした資料を丁寧にたどることで、出版社の広告の仕方や販売戦略を分析することが可能になっていた。

2. 研究の目的

アルゼンチンは、1970年代初頭までスペイン語圏の出版業をリードした国であり、ボルヘスを筆頭に、フリオ・コルタサル、アドルフォ・ビオイ・カサーレス、シルビナ・オカンポ、エルネスト・サバト、ファン・ホセ・サエールなど、世界的な作家を多く輩出している。これを踏まえて、アルゼンチン文学を代表する小説作品を10作抽出し、出版にいたるまでのプロセス、出版後の販売戦略、編集者と作者の付き合い方、作品の受容過程などを分析することで、出版業と小説創作の関係性を明らかにしようとした。

対象作品のリストは以下のとおり。

- アドルフォ・ビオイ・カサーレス『モレルの発明』(ロサダ社、1940年)
- マセドニオ・フェルナンデス『新参者の紙束』(ロサダ社、1944年)
- ホルヘ・ルイス・ボルヘス『エル・アレフ』(ロサダ社、1949年)
- アドルフォ・ビオイ・カサーレス『英雄たちの夢』(ロサダ社、1954年)
- シルビナ・オカンポ『招待客』(ロサダ社、1961年)
- レオポルド・マレチャル『アダン・ブエノスアイレス』(スダメリカナ社、1948年)
- フリオ・コルタサル『動物寓話集』(スダメリカナ社、1951年)
- フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』(スダメリカナ社、1963年)
- ファン・ホセ・サエール『傷痕』(スダメリカナ社、1969年)
- エルネスト・サバト『皆殺しのアバドン』(スダメリカナ社、1974年)

3. 研究の方法

アルゼンチンの出版業に関しては、すでにかかなりの先行研究があり、まずこれを詳細に調べ上げたうえで、『マルティン・フィエロ』や『スール』、『レアリダッド』、『アナレス・デ・ブエノスアイレス』など、当時の文芸雑誌を網羅的に検証して、その販売戦略や刊行作品の傾向などを分析した。また、1960年代の出版社については、作家セサル・アイラ氏、編集者レオノーラ・ジャメン氏など、当時についてよく知る作家や編集者がわずかながら残っており、直接証言を聞くこともできた。

文学作品に関しては、対象作品を精読してそのテキストを分析するとともに、作家たちの残したエッセイやインタビュー、日記や書簡を丁寧に読み込み、出版社・編集者との関係を知る手がかりを徹底的にチェックして分析した。ラテンアメリカ文学研究では、シャビ・アイエンやアルバロ・サンタナ=アクーニャなど、編集者や文学代理人に注目して文学研究を進める研究者も少しずつ現れ始めており、彼らの研究は随時参照した。

当時の文壇における交友関係や、出版社と作家の時に緊張に満ちた関係、文芸雑誌の創刊や寄稿をめぐる様々ないきさつに関しては、主要作家と付き合いのあった作家や文化人の回想録や証言をできるだけ広範に参照した。例えば、文芸雑誌『スール』を主催したビクトリア・オカンポの回想録と自伝、ボルヘスと恋愛関係にあったと言われている翻訳家エステラ・カントの随筆などが参考資料となった。

4. 研究成果

最も大きな研究成果は、2024年5月刊行の研究書『ラテンアメリカ文学の出版文化史 - 作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成』(寺尾隆吉編著、勉誠社、320ページ)であり、同書には、寺尾隆吉単著「20世紀のラテンアメリカにおける文学出版業」、同「出版黎明期のアルゼンチンとホルヘ・ルイス・ボルヘスの創作 - 「ドン・キホーテ」の作者ピエール・メナール」の背景」、大西亮単著「文芸誌『スール』とラテンアメリカ文学、以上三本の研究論文が

収録されている。また、同書には、ウルグアイ（浜田和範「フェリスベルト・エルナンデスの受容に見るウルグアイ出版産業の展開」）、メキシコ（仁平ふくみ「フアン・ルルフォ・作品がカノンになるまで フォンド・デ・クルトゥーラ・エコノミカ社と1940年代・1950年代の雑誌を中心に」、藤井健太郎「コスモポリタンなラテンアメリカ文学と文芸誌・出版社 カルロス・フエンテス、『レピスタ・メヒカーナ・デ・リテラトゥーラ、ホアキン・モルティス社、『ヌエボ・ムンド』』、ベネズエラ（グレゴリー・サンブラーノ「ベネズエラと「ラテンアメリカ文学のブーム」受容、出版社、論争」）における出版業と創作活動の関係をめぐる論考も併せて収録された。本書を編集する過程で、執筆者からスペイン語圏各地の出版業について詳しい情報を得られたことで、アルゼンチンの出版社が直面していたのと同様の問題が多く、多くの国で発生していたことが確認できたほか、スペイン語圏内、さらには英語圏やフランス語圏も巻き込んだ国際的出版ネットワークがどのように機能していたのか、その実態も少しずつ見えてきた。これが、現在進行中の研究計画「ラテンアメリカ小説の世界展開とスダメリカナ社の出版戦略（1959年～1976年）」の土台ともなっている。

出版社の協力を得て、対象となる作品の日本語訳と研究とを組み合わせる試みも行われ、その結果、シルピナ・オカンポ『復讐の女／招かれた女たち』（寺尾隆吉訳、幻戯書房、2021年、本文424ページ、作品研究79ページ）とアドルフォ・ピオイ・カサーレス『英雄たちの夢』（大西亮訳、水声社、2021年、本文279ページ、作品研究16ページ）を刊行することができた。また、2022年末には、幻戯書房と協力して、エメセー社から刊行されて後のアルゼンチン小説に大きな影響を与えたピオイ・カサーレスとシルピナ・オカンポの共作長編推理小説『愛する者は憎む』を翻訳したうえで、詳細な書誌と、アルゼンチンにおける推理小説の発展、さらには推理小説と出版社（エメセー社、ロサダ社、スダメリカナ社）の関係を詳細に研究した解説を収録することができた。現時点で、すでに翻訳、年表、書誌、解説の入稿は終わっており、2024年10月ごろには書籍として刊行される見込みとなっている。

意外な発見となったのは、スペイン語圏における日本文学の紹介においてアルゼンチンの出版社、とりわけスール社が重要な役割を果たしたという事実であり、改めてアルゼンチン出版界における翻訳文学の重要性を認識させられた。芥川龍之介や谷崎潤一郎のアルゼンチンにおける受容については、ブエノスアイレスで二度にわたって行った研究発表の場でも言及し、大きな反響を得た。研究発表の場で知り合った方々のなかには、現代アルゼンチンの文壇をリードする作家も含まれており、こうした人物から様々な裏話を聞くことができたおかげで、作家個人と出版社の関係を新たな観点から考えていくためのヒントを得られた。今後の研究にもこうした人脈は生きてくることだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 寺尾隆吉
2. 発表標題 20世紀のラテンアメリカにおける創作と出版戦略 アルゼンチン、ウルグアイ、メキシコの事例
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大西亮
2. 発表標題 文芸雑誌『スール』とラテンアメリカ文学
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryukichi Terao
2. 発表標題 Ryunosuke Akutagawa, fantaseado por Jorge Luis Borges: una lectura comparada
3. 学会等名 Colegio de Traductores Publicos de la Ciudad de Buenos Aires (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryukichi Terao
2. 発表標題 Traduccion como obra maestra de confusion: la apropiacion literaria en Japon y America Hispana
3. 学会等名 Museo Nacional de Arte Oriental (招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 シルピナ・オカンボ、寺尾隆吉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 幻戯書房	5. 総ページ数 512
3. 書名 復讐の女 / 招かれた女たち	

1. 著者名 アドルフォ・ピオイ・カサーレス (大西亮訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 296
3. 書名 英雄たちの夢	

1. 著者名 寺尾隆吉 (編著)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 320
3. 書名 ラテンアメリカ文学の出版文化史 作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大西 亮 (Onishi Makoto) (80328913)	法政大学・国際文化学部・教授 (32675)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------